


 書評

高橋三郎, 染矢俊幸, 塩入俊樹 訳

DSM-IV-TR ケーススタディ—鑑別診断のための臨床指針

石郷岡純

すべての精神科医が通読すべき 1 冊

待望久しかったアメリカ精神医学会による DSM-IV-TR ケーススタディの日本語訳が、このたび出版された。著者は DSM-IV 改訂の際の編集委員長である Allen Frances・デューク大学精神科教授と Ruth Ross である。

このケーススタディには 74 例が収録されており、16 章に分かれる各疾患カテゴリーで数例ずつを提示し、症例ごとに鑑別診断を含む診断へのプロセス、および治療方針まで解説するという体裁で構成されている。呈示される症例は適度に教科書的であるがリアリティもあり、解説も抑制の利いた語り口で進められているため受け入れられやすく、操作的診断法がはじまって四半世紀たった今このような診断スタイルがある普遍性に到達し、決して無味乾燥なものではないことを実感できる書物となっている。

本書は読者自らが触れる機会の少ない症例を経験するための症例集ではない。むしろ代表的な症例を通じて生きた診断学を学ぶための 1 冊である。全国の大学、病院では毎週症例検討会が開かれ、診断、治療について議論が交わされているであろうが、この書物に描かれている症例の呈示法、およびそこから得られる問題点の抽出法、診断へ至る思考プロセスは、そこに集まる臨床医が共通言語として共有すべきひとつのプロトタイプを示していると言えよう。こうした議論がされた後、診断学の歴史や最新の知見など、操作的診断ではカバーできない領域が活発に語られる症例検討会であれば、臨床の力を大いに伸ばすことのできる実りあるものにできるであろう。各施設で議論をリードする立場にある方々には、ぜひ本書で採られ

ているスタイルを参考にしていただければと思う。また、その意味では、これから精神科医として診断学を勉強していくものにとっては、きわめて効率のよい書物でもある。

本書を単なる教科書に終わらせない、興味深い 1 章が最後に第 17 章として設けられている。すなわち、操作的であるが故に生じる診断の不確定性、診断する臨床医の目の重要性、情報の量・質の重要性など、診断学の基本に関わる問題点を浮き彫りにする 1 章であり、それらを考えさせる 10 例が提示されている。ここでは現在の診断学、操作的診断の限界が症例を通じて赤裸々に描かれているが、一方では、長くこの診断体系の確立に取り組んできた著者らが、ベストではないがベターであると強烈に主張しているようにも見える 1 章である。操作的診断には、症状からは原因が特定できないという基本的態度と、薬剤性など、明らかに原因があると思われるものは除外するという相反する原則が併存しているが、訳者の高橋名誉教授(滋賀医大)が述べているように、新しい知見によっていつの日か今の診断基準が時代遅れになることを、この 1 章は予言しているように見える。

翻訳は新潟大学の先生方が分担で行い、さらにそれを染矢教授、塩入助教授が修正し、最後に訳者代表の高橋名誉教授が全文を校正するという念入りな工程を経て完成されただけに、統一された自然な文体で読みやすいものとなっており、すべての精神科医が一度は通読したい 1 冊に仕上がっている。

(東京女子医科大学教授・精神医学)

● A5 416頁 2004 定価6,300円(本体6,000円+税) 医学書院刊